

羽衣国際大学 令和五年度卒業証書・学位記授与式 式辞

最初に、今年元旦に発生した令和六年能登半島地震および翌二日の羽田空港での事故によって犠牲となられた方々のご冥福を、大学教職員を代表して心からお祈り申し上げますとともに、被災された方々が一日も早く日常を取り戻されることを祈念いたします。

本日、ここに羽衣国際大学令和五年度卒業証書・学位記授与式を挙行できますことは、本学にとりて大きな喜びです。

ただいま現代社会学部 一五一名、人間生活学部 一一六名、合計二六七名の卒業生に、「学士」の学位を授与致しました。

皆さん、ご卒業おめでとうございます。またこのたび卒業される皆さんを育て、支えてこられたご家族や関係者の皆様も、たいへんお喜びのことと存じます。本日は、羽衣国際大学の教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。

新型コロナウイルス感染症もようやくほぼ終息し、この三年間、規模を縮小して執り行わざるをえなかった卒業証書・学位記授与式も、本日はコロナ禍前と同様に多くのご来賓の皆様にご臨席賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

本日卒業される皆さんは、パンデミック第一波の只中に、本学に入学した学年でした。入学早々オンラインでの授業が続く、学外活動や海外研修など多くの行事を取りやめとなり、楽しい友人との語らいもままならない、入学前に思い描いていた大学生生活とは大きく異なる日々が続きました。ようやく対面での授業や課外活動がほぼ完全に復活したのは、二年生も半ばを過ぎた頃でした。その間、親元を離れて一人暮らしをしていた方々は、特に大変不安な思いをされたことでしょう。大学としても、想定外の事態を乗り切るために、可能を限り支援しましたが、皆さんはこの困難な状況を本当によく頑張つて乗り切り、今日の卒業の日を迎えられました。教職員一同敬意を表するとともに、改めてお祝いを申し上げます。

皆さんが今日手にした卒業証書には、そのような皆さん自身のご努力とともに、今日まで皆さんを有形無形に支えてくださったご家族や周りの方々のご支援と温かいお気持ちがつまっています。ぜひその方々への感謝の気持ちを忘れずにようにしてください。

さて、皆さんの多くは、毎日の大半を学びに充てることのできるまとまった期間を終え、社会への新たな旅に出発することとなります。

今から遡ること約七百年、十四世紀に世界を旅したイブン・バトゥータという人がいます。日本から遠く離れたアフリカ大陸の北西部、現在のモロッコに生まれたこの人物は、ちょうど今の皆さんと同じぐらいの歳、二十一歳のとき、現在のサウディアラビアにあるイスラームの聖地、メッカへの巡礼の旅に出ました。この巡礼の旅を皮切りに、実に三十年間をかけて、現在のシリア、インド、中央アジアや東南アジア、そしてアフリカ大陸では東海岸のタンザニア、サハラ砂漠を超えてマリまで旅をし、現在スベイン・ポルトガルがあるイベリア半島のアンダルスも訪ねました。途中三回ごく短期間、故郷に戻ったものの、五十歳になる頃まで旅をつづけました。

イブン・バトゥータが旅した十四世紀といえれば日本では鎌倉幕府が滅び、能狂言を初めとする室町文化が花開いた頃のこと、交通手段と言えは、徒歩か馬、あるいは砂漠を行くラクダや風を頼りに進む船であった時代に、それだけの大旅行をすることは容易ではなく、当時の代表的な疫病であったペストのパンデミックに遭遇したり、訪れた先の争いごとに巻き込まれたりしながらの旅でした。

彼は旅を終えたのちに、口述筆記によって詳細な旅行記を残し、後世の私たちにとって当時の各地の風俗や統治のあり方などを知る貴重な資料となっています。その旅行記によれば、多くの人々に世話になり、共に食事をし、話をし、笑いに興じ、また訪れた地の為政者に任せて、学識に基づいた

助言をしたり、と互いに助け、助けられる旅でもありました。

当時のイスラーム世界において、各地の修行場は旅人たちに宿泊場所や食事を提供する施設としても機能しており、またときにその地の為政者の保護も受け、現代の私たちが想像するよりは、快適に旅を続けることができたようです。

彼が踏破した距離は、航空機での移動が可能である二十一世紀の現代においても驚くべき長さですが、より重要なことは、その長さよりむしろ自分の意思で一步一步前に進み、結果として三十年間にも及んだ長い行程を、知的好奇心を失うことなく楽しみながら、人との出会いを大切に、考え、感じたことだろうと思います。

このイブニング・バトウータが旅した十四世紀とは違い、皆さんが小学生になった二〇〇七年にはアップル社からiPhoneが発売され、今はスマートフォンで地図アプリがどこへ行くにも丁寧に案内してくれる時代となりました。昨年末に発表された生成AIのチャットGPT4.0では、幅広いテーマであたかも人間と対話するかのようなやり取りができることが話題となり、先月には、無限の創造的可能性を連想させる日本語の青空の「空」から、Soratoと名付けられた動画生成AIも発表されています。

これらの技術革新は、これまで様々な開発された技術と同様に、私たちの生活を、より便利なものにしてくれることでしょう。しかし同時に、その技術をいかに使うのか、これは依然私たち人間次第です。新しい技術そのものに善も悪もありませんが、使い方を一歩誤れば、大きな混乱と悲劇が生まれます。

核をめぐる技術がその一例でしょう。エネルギーを生み出し、医療の発展にも貢献した半面、自然災害によって制御不能に陥り、多くの地域の生活を破壊しました。また核兵器に姿を変え、今を生きる人々に恐怖と困難をもたらし、国際社会における対話を阻んでいます。

今後、AIの発展と普及によって、ますます社会は変容することでしょう。とりわけ人が判断を下す際に最も必要とされる情報そのものを、AI技術を悪用して歪める事例はすでに起こっており、残念ながら今後はより頻繁に発生することが予想されます。AI技術がもたらす便利さを十分に活用しつつ、情報の正確さを見極める最後のステップは、人間に委ねられています。そこに、いくら技術が発展しようとも、私たちが学び続ける必要と理由があります。

ですから皆さんには、今日の卒業式が皆さんの学びの最終日ではないということをご心にどめておいてほしいと思います。社会に出て、これまでの環境では出会うことのない人々とも出会い、自分の持つ知識が不足していることをいやおうなく自覚させられる機会もあるでしょう。しかし、そこで決してうろたえたり、あきらめたりしないでください。私たち教職員も、この四年間、皆さんから多くを学びました。四年の間、しっかりと学び学士となられた皆さんには、社会に出てから新たな学びを積み重ねるだけの確たる基礎が備わっています。どうか本学の卒業生であることに自信をもつて、しかし慢心することなく、謙虚に日々歩いてください。

今、社会には多くの課題が山積していると同時に、皆さんを必要としている方々が大勢います。ぜひまずは周りの人々のために何ができるのか、を考えて、世界の様々な問題に思いをはせ、一日一日自分の意思で前に進み、少しずつより良い社会を築いてほしいと思います。

私たち教職員にとって、皆さんの旅立ちには名残惜しい限りですが、同時に大変誇らしく思います。これからも皆さんのことをいつまでも見守っています。

皆さんが明日からの人生を、夢を持って一步一步進み、皆さんご自身の素晴らしい「旅行記」を紡いでいかれることを心から祈念し、卒業式の式辞といたします。

令和六年三月二十日

羽衣国際大学学長 中川 恵